

健常高齢者と痴呆疑い (Clinical Dementia Rating ; CDR 0.5) 高齢者の視空間性認知障害に関する研究

著者	佐藤 真理
号	62
発行年	2003
URL	http://hdl.handle.net/10097/22562

氏 名（本籍）さ佐とう藤ま真り理

学 位 の 種 類 博 士 (障 害 科 学)

学 位 記 番 号 医 博 (障) 第 6 2 号

学位授与年月日 平成 15 年 3 月 24 日

学位授与の条件 学位規則第4条第1項該当

研 究 科 専 攻 東北大学大学院医学系研究科
 (博士課程) 障害科学専攻

学位論文題目 健常高齢者と痴呆疑い（Clinical Dementia Rating
；CDR 0.5）高齢者の視空間性認知障害に関する
研究

(主 査)

論文審査委員 教授 山 鳥 重 教授 糸 山 泰 人

教授 福 土 審

論文内容要旨

目 的

地域在住の高齢者で、臨床的に診断された健常高齢者、痴呆疑い（Clinical Dementia Rating；CDR 0.5）高齢者、痴呆患者を対象に、視覚性注意および複雑図形の識別能力を評価する Benton 視覚弁別検査（Visual Form Discrimination Test；VFD）と視覚性注意および視覚－構成能力を評価する Rey-Osterrieth Complex Figure Test（RCFT）コピー課題を用い、特に CDR 0.5 高齢者の神経心理学的な特徴抽出を行った。また、それらの検査が CDR 0.5 高齢者のスクリーニング検査として応用できるかどうかについても検討した。

方 法

対象者は宮城県田尻町在住の 65 才以上の高齢者 619 名であった。内訳は、対象者への面接および家族からの情報をもとに臨床的に判定された健常高齢者（CDR 0）群は 412 名、痴呆疑い（CDR 0.5）群は 168 名、痴呆（CDR 1&2）群は 39 名であった。各群に神経心理学的検査として、VFD および RCFT コピーを中心に用い視空間性認知機能を評価した。分析方法は、

- ① 神経心理学的検査について、CDR 0 群、CDR 0.5 群、CDR 1&2 群の比較を行い CDR 0.5 群の神経心理学的な特徴抽出を行った。また追加分析として、この群は年齢と教育年数に有意差があったため、年齢と教育年数を合わせた CDR 0 群と CDR 0.5 群で検討を行った。
- ② VFD と RCFT コピーの成績への年齢による影響を調べるために CDR 0 群と CDR 0.5 群の年齢群別の比較を行った。
- ③ VFD と RCFT コピーのスクリーニング検査への応用の検討を行った。

結 果

- ① VFD と RCFT コピーの得点は、CDR 0 群に比べ CDR 0.5 群で有意に低下した。CDR 1&2 群における Alzheimer 病（AD）患者の 50%に RCFT コピーの left カテゴリーの誤りがあり「左空間への不注意」が疑われ、CDR 0.5 高齢者にも同様の傾向がみられた。また、年齢と教育年数を合わせた分析では、RCFT コピーの left と detail のカテゴリーの得点は CDR 0 群に比べ CDR 0.5 群で有意に低下した。
- ② VFD 総点と RCFT コピーの left カテゴリーの得点は、CDR 0 群に比べ CDR 0.5 群は有意に低下したが、年齢の影響はみられなかった。
- ③ VFD と RCFT コピーの left カテゴリーの得点を組み合わせることで CDR 0 高齢者と CDR 0.5 高齢者を分ける感度は向上した。

考 察

CDR 0.5 高齢者では、複雑図形の識別能力の障害と「左空間への不注意」というべき視覚性注意障害が生じており、記憶以外の認知機能障害が疑われた。先行研究とあわせて考察すると CDR 0.5 の段階は健常高齢者の認知機能の低下とは質的に異なり、最軽度 AD (very mild AD) である可能性が示唆された。また VFD と RCFT コピーの 2 つの検査を含めた、CDR 0.5 高齢者のスクリーニング検査セットの開発の可能性が示唆された。今後は、VFD と RCFT コピーに、記憶、言語、前頭葉機能などの検査を加え、さらに検討していく必要があると思われる。

審 査 結 果 の 要 旨

わが国においては近年の痴呆患者の急増に対し、社会・医療的な受け入れ体制の実現が課題となっている。正しい対策を立てるためには痴呆患者の実態についての正確な研究が前提となる。痴呆は包括概念であり、実際には多種多様な医学的疾患が痴呆の原因となる。本研究は宮城県田尻町という特定のコミュニティにおける痴呆予備軍の早期発見および早期からの治療的介入を目指して行われたものである。

対象は田尻町在住の 65 歳以上の高齢者 619 名である。この人たちを社会での行動的变化を重視した評価法である臨床痴呆評価法（Clinical Dementia Rating：CDR）を用いて評価し、CDR 0 群（すなわち健常群）、CDR 0.5 群（すなわち痴呆疑い群）および CDR 1.0 および 2.0 群（すなわち痴呆群）の三群に分類している。そしてこのすべての対象者に対して、神経心理学的検査を行っている。本研究はその膨大なデータの中から、従来あまり注目されていない視覚的能力についてのデータを抽出し、検討を加えている。評価された能力は視覚性注意、複雑図形の識別能力（Benton 視覚性形態弁別検査：VFD を使用）、視覚性構成能力（Rey-Osterreith 複雑図形検査 RCFT のうちのコピー課題を使用）である。

その結果、CDR 0.5 群では CDR 0 群にくらべ、VFD 得点および RCFT コピー得点が有意に低下していることを見出している。さらに CDR 1 および 2 群では RCFT コピー課題において、その 50% で左側図形の誤りがみられ、左空間への不注意が存在するとしている。この傾向は CDR 0.5 群でも認められている。また、この成績低下は年齢および教育暦とは相関しないことも明らかにしている。

著者は VFD テストと RCFT コピーテストを実施すると、CDR 0 群と CDR 0.5 群をさらにはっきり区別できるとし、CDR 0 群と CDR 0.5 群の認知能力の差は連続的なものでなく、質的に異なるのではないかと主張している。

本研究は、変性性かつ緩徐進行性の痴呆（その代表がアルツハイマー病）では最初期から認知能力に障害をきたしている可能性があることを示唆しており、痴呆の早期発見、さらには特定の痴呆疾患（この場合はアルツハイマー病）の早期診断に道を開くものである。学位に値する研究と評価する。